

# 琉球大学学術リポジトリ

## 課題遂行力アップセミナーの実践による自律学習支援：SCATによる質的分析から見る参加者の評価

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2016-05-10 キーワード (Ja): 自律学習, 協同学習, 課題遂行力, 学習スタイル, eラーニング キーワード (En): Autonomous Learning, Cooperative Learning, Task Competence, Learning Style, e-Learning 作成者: 真島, 知秀, Majima, Tomohide メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/33827">http://hdl.handle.net/20.500.12000/33827</a>

## 課題遂行力アップセミナーの実践による自律学習支援

### － SCATによる質的分析から見る参加者の評価 －

真島 知秀

#### 要 旨

学習者の自律学習の支援を目的に、eラーニング教材を用いた学習者主導の自律学習型セミナーを実践し、セミナー参加者の評価を質的分析によって理論化することで、学習者の潜在的な評価の観点を探った。その結果、新しい学習スタイルによる協同学習が一体感と学習へのプラスの波及効果を生み、満足感と達成感が得られ、他者観察することで自己省察に繋がると評価していることが分かった。しかし自律学習型セミナーの実践には、事前学習による語彙の理解が必須で、積極的にコミュニケーションできるような進め方や、日本人アシスタントの協力が必要とされていることも分かった。課題としては、日本人アシスタントの役割を検討し、学習者に常に学習の斬新さを提供することである。そして課題遂行能力の向上や、自律学習に結び付くかどうかを検証するため、縦断的に調査を行い、データとして蓄積していくことが、多様化する日本語学習者の支援にも繋がるだろう。

【キーワード】 自律学習、協同学習、課題遂行力、学習スタイル、eラーニング

#### 0. はじめに

近年急速にグローバル化が進展する中、日本語学習者の属性が多様化し、従来の画一的な教育カリキュラムでは対応できないケースも増えてきている。琉球大学留学生センターは日本語と日本文化の修得を目的として、STRP<sup>1</sup>、URSEP<sup>2</sup>などの短期留学プログラム制度を設けており、毎年多くの留学生が集中的な教育を受けている一方で、大学院生研究生という身分の留学生も日本語を学んでいる。彼らは英語による指導教員の指導を受けながら専門の研究を行うことを第一の目的としているため、必ずしも日本語の習得を必要としない。おのずと日本語の学習に多くの時間を割けなくなり、教師主導型の受身学習になりがちである。このような学習者は、大学のカリキュラムや自分の学習環境など、様々な問題を抱えながら修学することになるが、実際に次のようなケースに遭遇することがある。

(1) 受講したい日本語科目があっても専門の授業のため時間割が合わず受講できないことがある。スケジュールを調整してなんとか受講できたとしても、途中から研究が忙しくなり日本語の授業に参加できなくなることもある。休んだ分を取り戻すことは容易ではなく、結果としてクラスについていけなくなる。

(2) 日本語科目を受講する学期に、自分のニーズやレベルに合った科目が開設されているとは限らない。仕方なく自分の学力より下のレベルのクラスを受講して学力を伸ばせなかったり、上のレベルのクラスを受講して学習量が追いつかずドロップアウトしてしまうことがある。

(3) 積極的に日本語を使う機会が少ないため、様々な場面で日本語に接触しながら習得していく連続性のある学習が困難である。おのずと授業だけに頼ってしまうため、特にチューター制度の終了後は、適切なフォローアップがないと次の段階へステップアップできないままになってしまう。

このような問題に対しては、学習者のニーズを反映した様々なコースを整備したり、フォローアップの強化を図るなどの対策が考えられるが、受身的学習方法を脱して、自ら新たな学習環境を構築しようとする姿勢がない限り、根本的な問題解決には繋がらない。このような現状を踏まえ、今回eラーニング教材を活用して、学習者主導で自律学習型セミナーを実践するという実験的な取り組みを行う運びになった。またセミナー実施後は参加者を対象にアンケート調査を行い、セミナーの評価とその効果を検証するための基礎データとして収集することにした。

本研究ではセミナー参加者の評価を質的に分析することで、学習方法に関する潜在的な評価の視点を調査し、どのようなスタイルの学習が効果的なかを検証していく。また自律学習に繋げるための支援のあり方を検討し、同様の問題を抱える高等教育機関において状況改善の一助となることを目的とする。

## 1. 先行研究

自律学習 (autonomous learning) とは、「学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず、教授者や教材や教育機関などといったリソースを利用して行う学習<sup>3)</sup>」と定義されるが、それは決して「一人で学習する」ことを指すものではない。梅田 (2005) は、「「一人で学習すること」ではないし、自らの学習を「一人で選び、決め、一人で計画すること」でもない。それを選び、決定し、計画するために、他者の援助を得たり、周りの物を利用したりもする。」と述べており、Dickinson, L (1987)、大木 (2004, 2005) も「「自律学習」とは、学習者が教師とは完全に独立しておこなう学習ではなく、さまざまな過程で教師の助言を受けて進めるものであり、「自律」の程度にはさまざまな段階がある。」と定義している。

自律の過程で様々なリソースが関わってくるが、日本語の習得に影響を与える学習リソースとしては、人的リソース、物的リソース、社会的リソースの3つに分類<sup>4</sup>される(田中・斎藤 1993)。しかし情報化社会においては、場所や時間に制限されるものが少なくなり、どのリソースへの接触も容易になってきた。特にパソコンといった物的リソースは、インターネットを介することで、人的リソースとなる相手と直接対面せず、しかも自分の部屋にいながらにして社会的リソースと接触できるという新たな接触場面であるといえるだろう(片山・菅 2010)。このように数ある学習リソースの中から学習者が選択し、決定し、計画・実行することは、自律学習という観点から見て大変重要である。

このような学習リソースをとりまく環境の変化により、授業スタイルも多様化してきた。従来の対面式の教育に対し、近年では情報通信技術( ICT : Information and Communication Technology ) 技術を駆使した ICT 教育の研究や実践が盛んである。ICT 教育は、かつては CD-ROM などに収録されているような伝統的な CAI/CALL (Computer Assisted Instruction / Computer Assisted Language Learning) を指しており、ネットワーク接続をしないスタンドアローン (stand alone) <sup>5</sup>形態であったが、現在はネットワーク接続による e ラーニング教材が主流で、目的によって同期型(リアルタイム型)と非同同期型(オンデマンド型)に使い分けられる<sup>6</sup>。さらに従来の対面式授業と e ラーニングを融合させたブレンディッドラーニング (Blended Learning) という授業スタイルにも関心が高まっている<sup>7</sup>。池田(2010)は、ブレンディッドラーニングを実践する中で、e ラーニング教材の利用が初級日本語の学習効果の向上に関係があることを明らかにしているが、スタンドアローン型教材から一貫して ICT を活用した外国語教育に取り組んでおり、過去の失敗例や具体的な対策案は ICT 教育を導入する上で、示唆に富む報告が多い。

## 2. JF 日本語教育スタンダード

国際交流基金は2010年より JF 日本語教育スタンダードに準拠した新しい教材の開発を始めた。JF 日本語教育スタンダードとはヨーロッパの言語教育の基盤である CEFR<sup>8</sup>(セファール) の考え方を基礎にした、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の方法を考えるためのツールである。開発者によると「そこでは、相互理解のためには日本語を使って何がどのようにできるかという「課題遂行能力」と、さまざまな文化に触れることではいかに視野を広げ他者の文化を理解し尊重するかという「異文化理解能力」が必要である」(来嶋・柴原・八田 2012) と述べており、今までにない新しい枠組みによる学習成果の評価ツールであることがうかがえる。また日本語の熟達度を「～できる」(「Can-do」) という形式<sup>9</sup>で示し、課題遂行能力が明示的で具体的な点においても大きな特徴がある。

## 2.1. テキスト

『まるごと 日本のことばと文化』(以下、『まるごと』)は、JF 日本語教育スタンダードに沿った教材である。2016年1月現在、入門(A1)<sup>10</sup>、初級1(A2)、初級2(A2)、初中級(A2/B1)の4つのレベルが刊行されており、それぞれ9トピックにテストが2回分収録されている。A4版フルカラーにより写真やイラストが多用され、音声CD付属ではなく教材ライブラリからMP3音源をダウンロードするというスタイルも、日本語教材としては斬新で、出版業界の今後の主流になるものと予感される。また、初級2(A2)レベルまでは「活動編」と「理解編」の2冊により構成されており、学習目標に応じて使い分けが可能な点も特徴の一つである。

「活動編」はコミュニケーション言語活動を中心に学ぶ教材のため、ひらがな・カタカナにローマ字ルビをつけて、文字学習の負担を軽くしており、文字を書く活動は極めて限られている。「理解編」はコミュニケーション言語能力のうち特に言語構造能力(文字、語彙、文法、文型)の学習を中心に構成されている。前半は「活動編」同様、ひらがな・カタカナにローマ字ルビがついているが、後半のルビは限定的使用になっている。ひらがな・カタカナの読み書きは勿論、漢字も学習項目に含まれている。

## 2.2. ウェブサイト

「まるごと+ (まるごとプラス)<sup>11</sup>」(以下、「まるごと+」)は『まるごと』の内容に沿って、日本語や日本文化が学べるウェブサイトである。細部まで緻密に設計されており、動画や音声、写真等で具体的な場面を理解しながら、「Can-do」達成のための練習が行える。また各課の学習項目には文法解説ページがあるので、学習者が自分のペースで復習や練習をするeラーニング教材として活用する以外にも、教室内で教師が補助教材として利用するなど、様々な活用方法を提案できるウェブサイトになっている。関連サイトとして「まるごとのことば<sup>12</sup>」があり、『まるごと』で使用されている語彙や表現の意味を調べることは勿論、音声も聞くことができる。さらにトピックや課、品詞で絞り込んで必要なリストを作成したり、選んだリストの語彙や表現でクイズを行ったりすることも可能である。いずれのウェブサイトも初級1(A2)までの内容であるが、テキストの構成や学習レベルからみても、少なくとも初級2(A2)のレベルまでは文法解説や対訳語彙リストが必要だと感じているため、今後の拡充が期待される。

## 3. 課題遂行力アップセミナーの実施

琉球大学留学生センターでは平成26年度後期に『まるごと』を使用して「基礎日本語(Basic Japanese)<sup>13</sup>」の講義を行ったが、春休み期間中も継続して日本語を学ぶ機会が欲しいという受講生からの要望もあり、フォローアップセミナーの実施を検討した。

### 3.1. 参加者

対象は「基礎日本語 (Basic Japanese)」の受講生および琉球大学所属の入門レベルの留学生 (その配偶者も可) とし、大学内で希望者を募ったところ、11名の学生が参加を希望し、うち8名が実際に受講した。

学生の出身地は、ケニア1名、モザンビーク2名、バングラデシュ2名、アフガニスタン3名の全て男性で、「基礎日本語 (Basic Japanese)」を履修した学習者だった。

### 3.2. 実施方法および期間

今回のセミナーは基本的には前学期に学んだことを復習しながら、課題遂行力の強化を図るためのフォローアップという形式をとった。ただしセミナーの運営は担当教員が必要以上に介入せず、学習者が主導して行う自律学習型セミナーという新たなスタイルを試みることにした。まず「まるごと+」で自習を促し (自律学習)、毎週指定された教室に集まって (対面式教育)、進行役が「まるごと+」を活用してセミナーを行う (eラーニング) という、変則的な融合方式 (ブレンディッドラーニング) を採用した。回ごとの学習範囲と進行役を決めておくことで、参加者は学習目標を持って自習する一方、進行役は「まるごと+」の内容を全て把握して、セミナーの流れを事前にイメージする必要があるため、自ずと自律学習に繋がる効果を期待した。

そして、練習問題を解きながら各課の「Can-do」を理解・実行し (課題遂行能力)、さまざまな日本文化に触れる (異文化理解能力) ための手助けとして、英語が可能な日本人アシスタントを2名置き、疑問や質問に答えたり、日本語の話し相手になってもらった。ただし、あくまでも進行役のアシスタントという立場に徹し、学習者からの質問や進行役からの要請があるまでは、積極的に関わることを控えるよう指示した。

セミナーの第1回目は担当教員主導で行い、「まるごと+」のTopic 1を解説しながらセミナーの進め方 (お手本) を示した。第2回目以降からは進行も全て学習者に任せて、学習者主導のフォローアップセミナーを実施した。ただしセミナー第6回目だけは「初級1 (A2)」のテキストに入るため、次の学期に向けての予備学習という内容になった<sup>14</sup>。

回	日	内容	方法
第1回	2/17	オリエンテーション、入門 (A1) Topic 1	担当教員主導
第2回	3/3	入門 (A1) Topic 2-3	学生主導
第3回	3/10	入門 (A1) Topic 4-5	学生主導
第4回	3/17	入門 (A1) Topic 6-7	学生主導
第5回	3/24	入門 (A1) Topic 8-9	学生主導
第6回	3/31	初級1 (A2) Topic 1-2	学生主導



### 3.3. 実施報告

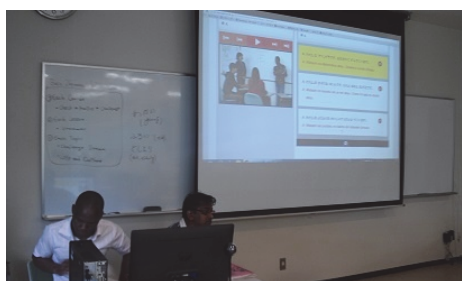
eラーニングのコンテンツを活用して、グループ学習のように学習者自らが進行役になってセミナーを進めていくという、参加者にとっても初めての経験で、動画を見ながら日本語を復唱したり、クイズ問題に真剣に取り組むなど、終始積極的な参加態度だった。



使用言語は使える範囲で日本語を使用するよう促した。参加した学習者は相手の発言に対して、「そうですか」「すごいですね」と日本語であいづちを入れるなど努力していた。進行役の学習者も「次はトピック3です」のようになるべく日本語を使っていたが、質問や議論ではほぼ英語になっていた。

進行役は日本固有の物や文化的な説明をするときには画像を検索して参加者に見せるなど、インターネットも効果的に活用していた。

このように進行役も参加者も全て学習者なので、普段の授業とは違った新鮮な雰囲気、全員で協力してセミナーを盛り上げようとする姿勢が見られた。当初意図した通り、担当教員が介入することなくセミナーを実施できた点から見て、この取り組みは成功したと評価できる。ただし課題遂行力がどこまで向上したかは今回の調査には含めなかったため、今後の経過を観察する必要があるだろう。



## 4. 参加者からの評価

学習者は今回の課題遂行力アップセミナーをどのような気持ちで取り組んでいたのだろうか。アンケート結果を分析してみた。

### 4.1. 分析方法

全6回のセミナーのうち、学生主導で行った第2回目以降からアンケートを実施した。アンケートは以下の4項目を自由記述で答えてもらった。

- (Q1) きょうの じゅぎょうで なにを べんきょうしましたか？
- (Q2) きょうの じゅぎょうで なにが よかったですか？
- (Q3) きょうの じゅぎょうの かいぜんてんは ありますか？
- (Q4) この スタイルの じゅぎょうについて コメントは ありますか？

ただし Q1 の項目は当該回に何を学習したのかを参加者に再確認してもらうためのもので、今回の分析内容とは直接関係ないため、Q2-4 までを分析データの対象とした。なお回答は英語で記入してもらい、それを日本語に翻訳したものを分析に用いた。学習者の中には専門の研究の研修等で参加できない日もあり、セミナーの全日程に参加できた学習者は、参加者 E、F、G の 3 名のみだった。アンケートの回収率は 82.5% だった。

実施回 内容 参加者	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回
	入門 (A1) Topic 1	入門 (A1) Topic 2-3	入門 (A1) Topic 4-5	入門 (A1) Topic 6-7	入門 (A1) Topic 8-9	初級1 (A2) Topic 1-2
A	※担当教員主導のセミナーのため、アンケート実施せず	○	○	○	不参加	○
B		○	○	○	不参加	○
C		○	○	○	不参加	○
D		○	不参加	○	不参加	不参加
E		○	○	○	○	○
F		○	○	○	○	○
G		○	○	○	○	○
H		不参加	○	○	○	○

#### 4.2. 質的分析手法

分析には SCAT (Steps for Coding and Theorization) を採用した。SCAT とは、「言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、①データの中の着目すべき語句、②それを言いかえるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく 4 ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリーラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である」(大谷 2008)。

アンケート結果の集計だけではデータの表面的な意味しか読み取れないが、文脈から抽出したコードをストーリーラインとして紡ぎ合わせることで、データの深層の意味を浮かび上がらせることが可能になる。特に今回のような簡易アンケートでは似たような短い回答が多かったが、SCAT ではそのようなデータでも深層の意味を再文脈化できるという特徴がある。以上の理由から、今回の分析手法として SCAT を採用することが最も望ましいと判断した。



### 4.3. 分析結果

以下に、Q2-4までの質問項目に対するアンケート結果を示す。今回は同一アンケートを複数回実施したこともあり、回を重ねる毎にセミナーに対する評価がどのように変化していったのかも見るため、ストーリーラインについてはアンケート実施日別の記述を試みた。

なお以下、本文中の「」はテキストデータ（回答の翻訳内容）、〈〉は回答した参加者、【】はアンケート実施日を表し、本文中の**ゴシック体表記**はSCATによる分析から得られた概念を示す。

#### 4.3.1. 授業で良かった点

良かった点について聞いたところ、「新しい語彙の学習〈A〉」、「新しい語彙を学べた〈G〉」のような一般的な意見以外にも、「日本人アシスタントが役に立った〈A〉〈B〉」、「日本人アシスタントの協力〈C〉」、「先生役と学生のコミュニケーション〈D〉」、「先生役のコメントがすばらしかった〈G〉」、「先生役がたくさん話していた（それが良いポイントでした）」〈F〉、「フリーディスカッション〈A〉〈H〉」などの意見が多く、まだ一人で学習するには不安な時期に対面で学べる、皆と一緒に学べるという形式に共感を得たようだった。また「学生全員で協力して日本語のディスカッションを行った〈C〉」、「学生同士が協力していたのが良かった〈G〉」などの意見からは、自律学習・協同学習の意義を理解しているものと読み取れた。その他、様々な回答をもとに浮かび上がった概念を、アンケート実施日別に紡ぎ上げたストーリーラインは以下の通りである。

さまざまな**学習素材の効果的な利用**によって先生役と学生と日本人アシスタントの間での**意思疎通の容易さ**が生まれ、計画的に**既習項目の再確認**が可能となり、**新たな学習スタイルの確立**が実現できた。また**協同学習**によりクラスに**一体感**が生まれ、**学習へのプラスの波及効果**があったと評価できる。【3/3】

通常の授業とは違う独自のスタイルに**新鮮味**を感じ、クラス全員による**協同学習**を実践できた。生徒間同士の**ディスカッション**や先生役と学生の**役割分担**が上手くいった。学習項目に関する会話、質問、回答といった**一連の流れのある教室活動**にも**満足感と達成感**を感じた。【3/10】

日本人アシスタントの活躍により、**ディスカッション**の時間を多く持つことができ**問題解決**に繋がった。学生同士で意思疎通を図ることは**相互理解**に繋がり、新しい単語や表現を学習できる機会にもなった。【3/17】

セミナーは**自己表現方法の習得**に繋がり、**既習項目の反復練習**によって理解が深まった。先生役の学生がよく準備をしてきており、**他者観察**をすることで**自己省察**にも繋がった。【3/24】

新しい語彙や文法を会話中心に進めながら**新たな学び**があった。学習者間の協同学習によって**身近で実用的な表現の学習**ができ、先生役の**多くの情報提供**に共感した。既習項目の復習の中で、会話、質問、回答といった**一連の流れのある教室活動**にも満足感を感じた。【3/31】

アンケートの設問項目「今日の学習で良かった点」に関する分析から得られた理論記述を以下に示す。ストーリーライン同様、本文中のゴシック体表記はSCATによる分析から得られた概念を示す。

- (1) **さまざまな学習素材の効果的な利用**により**新たな学習スタイルの確立**が可能になる。
- (2) **協同学習**はクラスに**一体感**を生む。
- (3) **協同学習**は学習への**プラスの波及効果**を生む。
- (4) 学習項目に関する会話、質問、回答といった**一連の流れのある教室活動**は**満足感と達成感**を感じる。
- (5) **他者観察**することは**自己省察**に繋がる。

#### 4.3.2. 授業の改善点

改善点について聞いたところ、全ての参加者がいずれかの実施日で「なし」と回答し、総じて満足できる結果となったが、「もう少し日本人アシスタントと日本語で話す必要がある<B>」、「もっと会話を交わす必要がある<E>」、「お互いにもっと話す機会を持つ<F>」などの意見からは活発なセミナーを求めている一方、「語彙を確認してくればクラスが良くなる<B>」、「難しい表現は別の易しい単語で練習する<E>」、「文法が簡単ではないため文法の強化が必要<E>」、「文法をカバーできればもう少し良くなる<G>」からは理想とするセミナーを行うには絶対的な語学力が足りないというもどかしさを感じているようだった。「日本人アシスタントの協力度によって授業がさらに良くなる<G>」からは今後アシスタントがどのように関わっていくべきかを検討する材料になった。その他の回答から紡ぎ上げたストーリーラインは以下の通りである。

総合的には満足だったが、限られた時間で**効率的な学習**を行うには、学生間で**積極的、自発的にコミュニケーション**を取っていくことが求められた。また、**コミュニケーション能力の強化**には**日本人アシスタントとの会話**の機会を増やすことが必要だが、そのためには、できるだけ日本語を使えるような**セミナー運営のアレンジ**を考えていかなければならない。また必要に応じて**補足資料の準備**をすることで**効果的な学習**に繋がると認識していた。【3/3】

概ね満足で問題なかったが、各学生が語彙の事前学習を行ってればより効率的な学習に繋がっただろう。日本人アシスタントの協力によってこの授業がさらに良いものになると感じた。【3/10】

とても楽しくて満足できたが、学生同士が互いに話す機会を多く持つなど、積極的な会話の実践が求められた。【3/17】

総合的に見て大変満足できる内容だが、難しい表現は易しい表現への換言によって語彙力の強化に繋がると感じた。【3/24】

総合的に見て満足のいくスタイルだったが、事前に語彙を確認するなどして語彙力の強化を図る必要があった。さらに文法の強化に取り組みつつも活発な会話を通じて学習項目全体をカバーしていけば、より良いセミナーになると感じた。【3/31】

アンケートの設問項目「今日の学習の改善点」に関する分析から得られた理論記述を以下に示す。

- (1) 効率的な学習には、参加者同士の積極的な会話の実践が求められる。
- (2) 効果的な学習には語彙の事前学習や、補足資料の準備、難しい表現は易しい表現への換言を行うなどの対策が必要である。
- (3) コミュニケーション能力の強化には、セミナー運営のアレンジが必要である。
- (4) 日本人アシスタントの協力は必要である。

#### 4.3.3. このスタイルの学習方法について

今回実施したウェブコンテンツを活用したセミナー形式の学習方法について聞いたところ、全ての参加者が「良い」と回答し、新しいスタイルに斬新さを感じている意見が多く、「ウェブサイトの内容が役に立つ<G>」、「ひらがなやカタカナを読みながら文の意味を理解することに挑戦できる<A>」で見られるコンテンツの完成度や、「素晴らしいプレゼンテーションだった<E>」、「先生役がよく準備していた<F>」のようなセミナーの進め方についても評価していた。その他の回答から紡ぎ上げたストーリーラインは以下の通りである。

総合的に見て満足できるスタイルで、既存の学習スタイルと比べて独創的であり、パソコンを使ったインタラクティブな学習により、理解を深めながら進めることができた。文字の読み方や、会話の動画、文型の確認など、総合的な学習ツールとして、語彙力や会話力の向上に繋がった。【3/3】

ウェブサイトのコンテンツが網羅的で、動画も適切な部分で文字化されている緻密さに完成度の高さを感じた。セミナーの円滑な進行を通じて学習項目の深い理解に繋がり、

会話の機会を増やすことで**コミュニケーション能力の向上**にも繋がると感じたことから、総合的にみて**満足**できるセミナーだった。【3/10】

**斬新なスタイル**でコンテンツの**完成度**が高かった。先生役の**事前準備**が良く、学習に対する**刺激**を受け、**満足度**も高かった。【3/17】

コンテンツの**有用性**に多くの学生が支持しており、先生役による**セミナーの円滑な進行**は他の学生の**学習意識の向上**にも影響を与えた。【3/24】

セミナーを通じて**新たな目標設定**をすることができ、**自律学習**へ繋げる機会となった。コンテンツも**大変有用**で、このスタイルの学習は**大変満足**だった。【3/31】

アンケートの設問項目「このスタイルの学習について」に関する分析から得られた理論記述を以下に示す。

- (1) ウェブサイトによる学習は**斬新**である。
- (2) ウェブサイトによる学習は**満足度**が高い。
- (3) ウェブサイトのコンテンツは**網羅的**である。
- (4) ウェブサイトのコンテンツは**完成度**が高い。
- (5) 先生役による**セミナーの円滑な進行**は、他の学生の**学習意識の向上**にも影響を与える。
- (6) 学習に対する**新たな目標設定**の機会を与え、**自律学習**へ導く効果がある。

#### 4.4. 実施回ごとの分析

回を重ねるごとにセミナーに対する評価がどのように変化していったのかの違いを見ると次のような傾向が出た。

アンケート実施回の前半では「独創的・斬新さ」、「コンテンツの完成度」といった、新しい学習方法や使用教材に新鮮味を感じている意見が出され、セミナー参加者自身も新しいスタイルに期待しているようだった。回を重ねるごとに「先生役（進行役）が素晴らしい」、「日本人アシスタントの協力」、「学生間の協力」など、セミナーの運営に関する具体的な意見が出され、参加者全員でセミナーを作り上げていく様子がうかがえた。

#### 4.5. 個人別の分析

個人による評価の違いを分析すると、全体的に批判的に評価する意見は少なかったが、Q3の授業の改善点について問うアンケートについては個人の学習目標によって異なる意見が出された。

参加者A、C、Hは全て「改善点なし」「このままでいい」「とても役に立っている」と回答し、今回のセミナーに**大変満足**している様子だった。

一方、参加者Bは、「もう少し日本人アシスタントと日本語で話す必要がある」に加え「語彙を確認してくればクラスが良くなる」といった語彙習得の重要性を主張し、参加者Dからは、「事前に参考資料が配布されていればより効果的」という意見が出た。『まると』のテキストはコミュニケーション重視の内容になっているため、語彙や文法の説明も必要最小限に抑えられていることから出た意見と考えられる。

参加者Eは、「もっと会話を交わす必要がある」以外にも「難しい表現は別の易しい単語で練習する」といった文型や表現の強化を目指すセミナーを求めているようだった。しかし参加者Fは、「お互いにもっと話す機会を持つ」「授業中はなるべく日本語を使うようにする」など、コミュニケーション重視の場にしたいという考えだった。

参加者Gからは、「文法をカバーできればもう少し良くなる」の他、「日本人アシスタントの協力度によって授業がさらに良くなる」といった意見も出され、日本人アシスタントがどのように関わっていくのかも鍵になることが読み取れた。

## 5. 課題

ストリートラインから導き出した理論記述をさらに批判的に検証し、追究すべき点や課題を挙げてみる。

### (1) 日本人アシスタントについて

今回たまたま英語が可能な日本人アシスタントが加わってくれたが、毎回同等の語学力を有したアシスタントが見つかるとは限らない。媒介語を使えない日本語のみのアシスタントでも大丈夫なのか、また日本人アシスタンスが探せなかった場合、学習者だけでも今回のような自律学習型のセミナーが成立するのだろうか、といった点も課題として浮かび上がった。それを検証するため、さまざまな条件でのセミナーの実践が必要になってくるだろう。

### (2) 実施方法の斬新さについて

参加者からはセミナー実施方法の斬新さについて好評価を得ていたが、単に学習スタイルの斬新さに留まるだけでは、回を重ねるごとに新鮮味がなくなることは避けられない。斬新さが学習意欲を刺激するのであれば、eラーニング教材やブレンディッドラーニングについての見識を深め、常に新しい方法を提案していくことが求められるだろう。

### (3) 課題遂行力向上の検証

今回の学習スタイルが課題遂行力の向上に影響したのかは検証できていない。ただし課題遂行のために自ら行動していく自律学習に結び付いたのであれば、課題遂行力向上の第一歩と判断できる。可能な限り縦断的に調査を行い、分析データとして蓄積していくことが、多様化する日本語学習者の支援にも繋がっていくだろう。

## 6. まとめ

本稿ではeラーニング教材を活用した学習者主導の自律学習型のセミナーを実践し、その評価をSCATによる質的分析によって理論化することで、学習者の潜在的な評価の観点を探った。さらに自律学習に繋がる支援のあり方についても考察を行った。

集中的な日本語教育を受けられないからこそ自律学習が必要であり、積極的に他者の援助を得たり周りの物を利用したりするという、高い学習意識の構築が求められてくる。

「授業を受けてさえいれば自然と日本語ができるようになる」という漠然とした期待感を捨て、自律学習を意識化させることが教師の役割でもあり、学習者の環境に応じて常に柔軟な方策を提案していくことも、また必要であろう。

## 参考文献

- (1) 池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境における e ラーニングシステム利用の効果に関する研究：立教大学初級日本語コースを事例として」『異文化コミュニケーション学部紀要 (ことば・文化・コミュニケーション)』2, pp. 1-12
- (2) 稲葉直也 (2014) 「早稲田大学における e ラーニングシステム」『早稲田日本語教育学』16, pp. 61-72
- (3) 梅田庸子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割 —学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る—」『言語と文化』, 39-12, pp. 59-77
- (4) 大木充, 田地野彰, 浅田健太郎, 高橋克欣 (2004) 「自律学習と学習者の動機づけに対するCALLの有効性 —自律学習支援環境の構築に向けて—」『フランス語教育』32, pp. 87-100
- (5) 大木充 (2005) 「自律学習と自律学習型 CALL」『MM News No. 8』, 京都大学大学院人間・環境学研究科マルチメディア教育小委員会, pp. 27-32
- (6) 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』Vol. 54, No. 2, pp. 27-44
- (7) 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10 (3), pp. 155-160
- (8) 片山智子・菅智穂 (2010) 「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』第19巻, pp. 79-89



- (9) 加藤由香里 (2007) 「eラーニングが可能とする学習環境の改善 —日本語教育の事例を中心に—」『大学教育ジャーナル』第3号, pp. 69-74
- (10) 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2012) 「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号, pp. 103-117
- (11) 塩澤真季・石司えり・島田徳子 (2010) 「言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析 —JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて—」『国際交流基金日本語教育紀要』6, pp. 23-39
- (12) 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実践 —学習支援システムの開発—』大修館書店
- (13) 独立行政法人国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010』第三版, <[http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010\\_all\\_3e.pdf](http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all_3e.pdf)>
- (14) 独立行政法人国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』日本語国際センター事業化開発チーム
- (15) 篠崎大司 (2013) 「日本語上級文法 eラーニングコンテンツの開発 —ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」平成 24 年度漢字・日本語教育研究助成制度報告書『漢字・日本語教育研究』第2号, pp. 62-75
- (16) Bersin Josh (2004) "Best Practices, Proven Methodologies, and Lessons Learned," John Wiley & Sons, Inc., (邦訳 赤堀侃司 (2006) 『ブレンデッドラーニングの戦略』東京電機大学出版局
- (17) Dickinson, L. (1995) Autonomy and motivation A literature review. System. Vol. 23. No. 2, pp. 165-174

(琉球大学留学生センター)

---

<sup>1</sup> STRP (Short-Term Regular Exchange Program)。琉球大学と学生交流協定を結んでいる世界各地の大学から留学生を受け入れ、琉球大学が提供する専門分野や日本語の科目を受講、または研究等を行うことができるプログラム。

<sup>2</sup> URSEP (University of the Ryukyus Short-Term Student Exchange Program)。日本語や日本文化を専門としない交換留学生を受け入れ、日本語を学びながら、英語で沖縄や日本の文化や専門科目を受講することができるプログラム。

<sup>3</sup> 国立国語研究所監修『日本語教育重要用語 1000』(1998) , パベル・プレス

<sup>4</sup> ①人的リソース (教室内での日本語教師、教室外のあらゆる場面で接触する人など)、

- 
- ②物的リソース（書籍、視聴覚媒体、インターネットからの情報など）、③社会的リソース（ミーティング、サークル、パーティーなどのコミュニティ）が挙げられる。
- <sup>5</sup> コンピュータを他のコンピュータと接続せずに利用する、いわゆるオフラインの状態。
- <sup>6</sup> 同期型はネットワークを通じた対人コミュニケーションツールになるため時間の制約を受けるが（例：ネット会議、電話会議など）、非同期型は時間の制約を受けない（例：電子メール、インターネット配信など）。
- <sup>7</sup> 授業方法によっては反転授業（Flipped Learning）という名称で呼ばれることもある。
- <sup>8</sup> CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）の略。語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格として、欧米で幅広く導入されつつある。「can-do」による言語熟達度は、A1、A2、B1、B2、C1、C2 という6段階の尺度で表される。
- <sup>9</sup> 例えば「講演やプレゼンテーションをする」という言語活動がレベルによってどう変わっていくのかを「Can-do」で示すと以下ようになる。（独立行政法人国際交流基金（2013）『JF 日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』より抜粋）
- A1 非常に短い、準備して練習した言葉を読み上げることができる。
- A2 身近な話題について、リハーサルをして短い基本的なプレゼンテーションができる。
- B1 自分の専門でよく知っている話題について、事前に用意された簡単なプレゼンテーションができる。
- B2 事前に用意されたプレゼンテーションをはっきりと行うことができる。
- C1 複雑な話題について、明確なきちんとした構造を持ったプレゼンテーションができる。
- C2 話題について知識のない聴衆に対しても、自信を持ってはっきりと複雑な内容を口頭発表できる。
- <sup>10</sup> 括弧内（A1）、（A2）、（A2/B1）はJF日本語教育スタンダードの言語熟達度レベルで、（A2/B1）は両レベルにまたがった構成であることを表す。
- <sup>11</sup> 「まるごと+」ウェブサイト <http://marugotoweb.jp/>
- <sup>12</sup> 「まるごとのことば」ウェブサイト <http://words.marugotoweb.jp/>
- <sup>13</sup> 平成26年度後期開設科目『まるごと かつどう 入門（A1）』『まるごと りかい 入門（A1）』の両テキストを使用し、週3コマ（90分×3）を15週行った。
- <sup>14</sup> 平成27年2月17日～3月31日の期間、週1回2時間（14:00～16:00）のセミナーを計6回実施した。

**Support for Autonomous Learning by the Task Competence Seminar  
- Evaluating Participants by SCAT Analysis -**

MAJIMA Tomohide

**Keywords:** Autonomous Learning, Cooperative Learning, Task Competence,  
Learning Style, e-Learning

**Abstract**

We organized a learner-driven seminar of autonomous learning with e-Learning materials to support for autonomous learning of the learner, and analyzed the potential needs from the theorized SCAT technique for evaluating participants. As a result, the new style of cooperative learning has generated a sense of unity and the wavelength effect, as well as feeling of satisfaction and accomplishment. Furthermore, it is also found that self-reflection is led by observing others. However, conducting autonomous seminar requires the prior confirmation of vocabulary, the style of proceeding by active communication, and cooperation of Japanese assistants.

As a challenge, considering the role of Japanese assistant and constantly suggesting ideas for entertaining learners will be the key. Moreover, continuous research to the utmost level and accumulation of future data will support the diversified Japanese learners, such as verifying the actual increase of the ability of task competence and autonomous learning.

(University of the Ryukyus)